

■ 過半の受験生が解ける問題さえ得点できれば合格できる試験

平成30年9月4日

学科本試験では、正答枝の内容だけではなく、他の選択枝との兼ね合いや、設問の言い回しによって問題の難易度が決まります。正答率が同程度の問題でも、回答分布や傾向、問題の「質」は異なります。

以下は、平成30年度本試験の解答分布の事例です（％は小数点以下切捨）。

●計画科目【1問目】

- 1 番選択枝 - 9%
 - 2 番選択枝 - 2%
 - 3 番選択枝 - 85%**
 - 4 番選択枝 - 2%（回答者の85%が3番と回答）
- ※この問題の正答枝は、3番選択枝。

単純に正答枝が簡単だったから得点できた問題（過去問ほぼそのまま等）や、他の選択枝が簡単で正答枝を絞りやすかった問題の場合は、上記のような分布となります。

●計画科目【11問目】

- 1 番選択枝 - 47%**
 - 2 番選択枝 - 9%
 - 3 番選択枝 - 6%
 - 4 番選択枝 - 35%
- ※この問題の正答枝は、1番選択枝。

特に1番選択枝と4番選択枝の難易度が高く、どちらが正答枝になるかを絞り切れない様子が上記の分布から伺えます。このレベルでの「2択の勝ち負け」には、当日の「運」もあるでしょう。

●環境設備科目【13問目】

- 1 番選択枝 - 15%
 - 2 番選択枝 - 51%**
 - 3 番選択枝 - 21%
 - 4 番選択枝 - 11%
- ※この問題の正答枝は、2番選択枝。

同様に、そこそこ難しい問題ですが、回答が分散していることから「できる受験生は得点できる問題」と言えます（決して難問ではありません）。他の問題をケアレスミスで失点している場合は、こういった問題で得点し、挽回する必要があります（試験当日は不利な展開）。一方、学習していく上では、得点を目指すレベルと言えます。

●環境設備科目【12問目】

- 1 番選択枝 - 34%
- 2 番選択枝 - 28%**
- 3 番選択枝 - 16%
- 4 番選択枝 - 20%

※この問題の正答枝は、2番選択枝。

正答枝だけでなく、複数の選択枝に難問が含まれている場合、回答が分散したり、正答枝よりも高い回答率の選択枝が現れます。このような問題は、得点できなくても構いません。

このように正答率・解答分布だけでも多様な分析ができるのですが、5科目トータルで正答率の分布は次のようになります。

正答率 計 125 問

- 90%台 3問
- 80%台 20問
- 70%台 32問
- 60%台 26問
- 50%台 14問
- 40%台 10問
- 30%台 10問
- 20%台 8問
- 10%台 2問

ここからわかることは

「正答率が50%以上の問題数が95/125(残り30問を勘で回答したとしても1/4の確率で更に7点を加点できる)」です。つまり、「**過半の受験生が解ける問題を確実に得点できれば、合格圏内に入れる**」ということです。確かに年度によってトータルの難易度は変わりますが、正答率30%前後の問題が多数を占めることは有り得ませんし、出題者側も「一級建築士にふさわしいかどうか」を難問によって判別できるとは考えていません。難問が解けなくても、新問を知らずとも、焦ったり落ち込む必要は無いのです。ただし、**極端な苦手科目があったり、ケアレスミス**を多数しているようでは、**太刀打ちできません**。

もう少し詳細に見てみましょう。

科目別正答率分布 (H30)

	計画	環設	法規	構造	施工
90%台	2問	0問	0問	1問	0問
80%台	2問	4問	6問	4問	4問
70%台	7問	8問	7問	7問	3問
60%台	1問	3問	5問	12問	5問
50%台	0問	3問	3問	5問	3問
40%台	4問	0問	4問	0問	2問
30%台	3問	1問	2問	1問	3問
20%台	1問	1問	2問	0問	4問
10%台	0問	0問	1問	0問	1問

60%以上 得点できて当たり前の問題(落とすと痛い)	Aランク(計81問)
40%以上 60%未満 出来る受験生が得点できる問題	Bランク(計24問)
40%未満 得点できなくても構わない問題(取れたらラッキー)	Cランク(計20問)

Aランクの問題について

ミスをしない人は居ません。しかし「ミスの仕方」は、人によって違います。「読み落とし」、「読み間違い」、「思い込み」、「精度不足」、「理解違い」等々、いろんなパターンでの失点があります。つまり、それぞれ「対策の打ち出し方」が変わるということです。適切な対策を講じることで、確実に得点が伸びます。

「ケアレスミス」による失点に対し、「次回は気をつけよう」程度に考えている場合、来年も異なる問題で同じようなミスをしがちです。読み方の工夫や、イメージの引き出し方の工夫を記録して「強く意識づけ」しておきましょう。

「精度不足・理解違い」による失点に対しては、「正答枝」の他に「正答枝以外を選んだ理由」にも着目しましょう。少なくとも2つ以上の「曖昧」が存在したから得点できなかったわけです。調べるべき類似の過去問は、相当数あるはずですが、ただし、「受験生が曖昧にしやすい問題」は限定的です。出題者は同じ題材を何度も使い回します。頻出の知識だけではなく、頻出の出題パターンを、過去問から学んでおきましょう。

Bランクの問題について

出題者が「ちゃんと勉強してきたかどうか、見極めたい問題」が多く含まれています。「〇っぽい×」をスルーして「×っぽい〇」に引っ張られたり、曖昧な理解・暗記の選択枝が複数あるなど、迷う理由が必ずあります。しかし得点可能な難易度なので、学習の上では、このレベルの難易度や要求される精度に対応できる事を目指しましょう。

Cランクの問題について

内容の復習や、出題の手法については確認するべきですが、本格的な対策は不要です。

自分自身の弱点や不足を洗い出し、「対策の打ち出し方」をどこまで意識できるか、そこが重要です。

自分は、何故その選択枝を選べたのか、または選べなかったのか。自分はどんなミスをしやすいのか。どこで時間をロスしているのか。 これらを意識して検証することで、今後の学習の方針や、本試験への対策を講じることが出来ます。